

未来章：西欧近代主義の地平線の向こうを見にいこう

向こう側にあるものを少しでも垣間見ることはできないだろうか、との思いは誰もが持っているはずです。多くの人たちが将来予測に関心を示しているのもそのためです。事業の成功や金儲けにつながらなくても、知的欲望がそうさせているようです。西欧近代主義を超えたところに在るものもその主要な対象の一つだと言えます。

歴史の上でそれが見えるようになるのは何時のことだろうか、との想いを前章で述べましたが、各人それぞれにこの将来像を想い描くための、ものの見方や考え方はあると言えそうです。本文中にも幾つか上げています。本章で紹介するものは次の通りです。

- ・現実の意味、すなわち真なるものを捉えるための思考と行動
 - *主体である自分が自分であることの証を「われ交感し、そして惟う、故にわれ在り」と認識して物事や事象に当る
 - *現象の集まりが全体として表現しているものがあると認識し、その意味を掴むことに努める
- ・変化と発展の在り方から捉えた文明観と歴史観
 - *「環境からの働きかけの結果は無意識内に沈澱する」、これが変化の源だと認識する
 - *「無意識内に沈澱しているものが具象化されて外部に現われる」、これが環境の変化となって文明の転換を促すと認識する
 - *文明の歴史とは、「環境からの働きかけの結果の無意識内への沈澱」と「無意識内に沈澱しているものの外部への具象化」とが、時間の流れの中で相互作用を繰り返すことであると認識する
- ・人類にとっての最高の善
 - *環境は変化し続けるものであることを強く意識する
 - *環境が変化し続ける中で生存し続けることこそが最高の善だと認識する

1. 現実の意味、すなわち真なるものを捉えるための思考と行動

この世界にあるものは全て、孤立して単独で存在しているではありません。生命を持つか否かに拘わらず、自己の周囲のものからの影響を受け、これを感じ取っています。同時に、周囲のものに対して働きかけ、周囲のものはその影響を感じ取っています。

即ち、この世界にあるものは全て、周囲のものと交感し合っているのです。交感することは存在の証であり、交感の無いところからは何も生まれないのです。これまでたどってきましたデカルトの思考と行動を見ていきますと、このことがよく解ります。

デカルトは理性を重視し、自分が自分であることの理由を「考えること」として、演繹を基盤に置いた実践的哲学を創り上げました。そのプロセスは、理性の働きと演繹的思考だけから成り立っていた訳ではありません。彼が方法序説で語っている通り、世界という書物の中での研究でも、重視し多用した実験でも、交感を通して思考し真実に迫りました。

ところが彼は、自分が自分である理由として充分に感じていたはずなのに、「交感すること」を「考えること」ほどに訴求力のある言葉で表現しなかったのです。「われ惟う、故にわれ在り」と表現されたものだけが後世の人たちを印象付け、自分が自分である理由というよりも理性的に考えるための規範と受け止められました。

こうして心身二元論が正当化される状況の下で、プロテスタンティズムの倫理が資本主義の精神へと転換されていき、弱点を持った現代文明を生み出すことにつながったのです。

「交感するわれ」が、自分が自分である理由であることは明らかでしょう。デカルトの取った行動自体もそれを示しています。こうしたことから言えることが、「われ交感し、そして惟う、故にわれ在り」こそが重要だということです。

これを自分が自分である理由と認識し、理性的に考えるための規範とすることが、デカルト以降に活躍し、西欧近代主義の精神を育て、繁栄する現代文明を作り上げた人々の思考の枠の外へ出て、西欧近代主義の向こうにあるものを見にいくために欠かせないと言えるでしょう。

「われ交感す」を実践する際私たちは自分を取り巻く環境の中にいます。その環境とは、多くの物体と多くの現象が埋めている時間と空間です。そこで私たちは交感する訳です。そこで、交感というものを具体的に掴みにいってみます。

環境の中に身を置きますと、そこで様々な物体や現象が知覚されます。受動的に知覚するものもあれば、能動的に行動して知覚するものもあります。知覚しようとして能動的に行う行動が観察です。

現象や物体に働きかけて、そこから起こる反応や変化を知覚しにいく行動が実験です。ある現象や物体に、ある方法で働きかけると、どんなことが起こるかを考えることを思考実験と呼びます。一般的に以上に紹介したような行動を“交感”と呼ぶことができます。

交感とは、対象への働きかけと、対象の反応の知覚と受け止めることができます。対象もまた、こちらの働きかけを現象として知覚し、これに何らかの反応をしてこちらに働きかけます。こうして交感が成り立ちます。

これが最も単純な交感ですが、現実には起こっている交感は、知覚だけではなく思考も絡んでもっと複雑です。即ち、交感は交感性だけによって行われるのではなく、理性も絡んでいるのです。

単一のあるいは複数の物体や現象を知覚した時、知覚したその事だけから反応することがある一方、知覚したことに対する理性による思考を経てから反応することもあります。これは、物体や現象の集まりを体系化・構造化することができる場合に起こります。

ところが、こうした一般的な理性の働き以外の何らかのプロセスを経なければ反応できない場合があります。物体や現象がばらばらで脈絡は見られないが、それらが同一環境の中で存在していたり、起こっているような場合です。

こんなケースに遭遇した時、それぞれの物体や現象は無関係であると片付けてしまうことも少なくありません。ところが一部の、創造性の高い人たちやプロフェッショナルな感性を身につけた人たちがその脈絡を感知し、その環境の中で物体や現象の集まりが表現している意味を見いだすこともあるのです。

こうしたケースでは知覚や思考だけではなく、発想や閃きが必要だと言えます。こんなケースでも多くの経験が積み重ねられまると、ある種の法則のようなものが生まれ、前記のような理性による思考が可能になってくるものもあります。

こうした交感性と理性の相互的な働きが、次の適切な反応や適切な思考を生み出すことになると言えます。そして、この交感性と理性の相互的な働きの最高のものは次のように表現することができます。

「物体や現象の集まりが全体として表現している意味を捉える力」

発想力とか閃き力をも含めて交感性と理性との相互的な働きとは、このように定義することができそうです。これを理解するために一つの事例を上げて説明します。

物質が存在することの本質と言われる、物理学の対象である素粒子を考えてみます。湯川博士の中間子でも、小柴博士が存在を検証したニュートリノでも、ヒッグス博士の

ヒッグス粒子でも、その存在を人間が知覚できた訳ではありません。様々な物体や現象をつなぎあわせたり統合したりして、物体や現象の集まりが表現する意味を掴みにいき、その存在を提唱したのです。

小柴博士の場合、さらに別の現象がこれまでの集まりに付け加えられれば、ニュートリノの存在がさらに確信的なものとして表現できると考え、交感性と理性との相互的な働きの下にその現象を捉えることに取り組み、成功しました。このように、本質と言われる素粒子は、物体や現象の集まりが表現している意味として捉えられているのです。

世間でよく言われる、現象に惑わされずに本質を掴みにいけ、という言葉がありますが、人間が知覚できるのは現象と物体の存在だけです。本質を直接知覚して把握することなどできるはずがありません。

現実に本質とは、物体や現象の集まりが表現している意味に他ならず、本質を掴む力とは、交感性と理性の相互的な働きの最高のものとして現れる力、と呼ぶことができるでしょう。

現実の意味（即ち真なるもの）を捉えるための思考と行動とは、このように受け止めることができます。こうした思考と行動を日々積み重ねることを通して、西欧近代主義を超えたところに在るものが見えてくるようになる。そんな予感が湧いてきています。

2. 変化と発展の在り方から捉えた文明観と歴史観

文明を創るのは人間です。そして、既存の文明を変えていくのも人間です。その人間が何らかの仕方で文明を創り、何らかの行動で文明を変えていくのです。その仕方や行動は人間の精神や歴史を克明に調べていくと見えてくると感じています。

歴史とは時系列に沿って文明の進展や変化を表現したものです。その変化の源となるものは人間の精神と身体の中にあります。それは理性、交感性、知覚といったものです。こうしたものの働きが文明を創り、文明を変えていき、歴史の原動力となるのです。こうした理性、交感性、知覚の働きが文明を変える際の在り方は、ユングの心理学の考え方から適切な説明ができそうです。

ユングの心理学によれば、人間の心には意識の世界を遥かに上回る規模の無意識の世界があり、これが人間の行動を支配していると説かれています。無意識には三種類あります。

一つ目は個の心にある個人的無意識で、個人の体験や身を置いた環境の影響により生成されるものです。二つ目は集団的無意識で、何らかの集団がその体験や周囲の環境から影響を受けて生成されるものです。

そして三つ目は、普遍的無意識とか遺伝的無意識と呼ばれるもので、民族や国家社会のような大きな集団に生成され、民族や国家社会の世代交代を通して遺伝のように受け継がれていくものです。

ユングは、人間の行動の多くは意識よりも無意識に支配されていると説いています。自分の過去の行動を振り返ってみますと納得できることが多く、身近にあった大衆行動などもうまく説明できることが多いことに気付きます。

脳による記憶の仕方や記憶を引き出す仕組みに関する、脳神経科学者のアントニオ・ダマシオの仮説からも、類似のことが推論できます。その仮説とは次のようなものです。

- ・人間の体験は脳のしかるべき複数の部分に表象を残す。これが記憶の源である。
- ・記憶は脳に残された表象をつなぎ合わせることによって形成されるものであり、コンピューターの記憶装置のように、体験したことをそのままの形で保存するものではない。
- ・記憶が失われるということは、体験した時と同じように表象をつなぎ合わせることができないということである。

このような仮説から色々な発想が生まれてきます。

- ・ユングの主張するところの膨大な規模の無意識とは、ダマシオ仮説が示す脳に残された膨大な量の表象の蓄積のことだろう。これが何かの機会に何らかの仕方をつなぎ合わされると、記憶として、あるいは発想として意識の領域に現れるのだろう。
- ・ある場面で脳に残された表象が、その場面を再現するのとは別の仕方、別の領域にある表象とつなぎ合わされたりすると、それは記憶ではなく、創造的な発想として意識の領域に現れるのだろう。
- ・意識の領域に現れることがなくても、何かの機会に何らかの仕方をつなぎ合わされた表象群が、意識されることなく、行動を支配する脳の部分に影響を及ぼして行動を支配することがあるのだろう。

といったことが想像され、ユングの心理学を脳神経科学が裏付けて科学的な信頼性が高まり、人間の考動の産物である社会や文明や歴史を捉える上で、大きな進歩をもたらす

ことが期待できます。即ち、ユングの主張する普遍的無意識あるいは遺伝的無意識が文明の発展や歴史を左右すると考えることが適切だと理解されるようになるのです。

人間の行動の大きな部分は無意識の領域にあるものに支配されています。これは個々の人間にだけ言えるのではなく、複数の人間から成る集団にも、民族や国家のような大きな集団にも言えるのです。そして特に、普遍的無意識あるいは遺伝的無意識と呼ばれる、民族や国家のような大集団の持つ無意識の領域は、これが文明や歴史を動かす行動に大きな影響を与えます。

人間はある環境の中で生き、行動していると、その環境から影響を受けます。その影響は表面に現れる行動にも変化をもたらしますが、その大部分は無意識の中に沈殿物を生成します。これが「内的沈殿」と呼ばれるものです。この沈殿物は何らかの機会を得て、人間の行動に現れてきます。これが「外的具象化」と呼ばれるものです。

文明とは、内的沈殿を通して普遍的無意識の中に蓄積した沈殿物は何らかの機会を得て、人間の大集団にもたらされる行動を通して、外的具象化として創り出されるものなのです。新たに創り出された文明は新たな環境をもたらし、そこでまた新たな内的沈殿を生みます。文明の発展は、内的沈殿と外的具象化の相互作用の環の連続を通して起こっているのです。

これが、人間の精神の機能から、変化と発展の在り方を捉えた文明観、歴史観です。文明や歴史の主役が人間であることを考えますと当然のことだと言えるのかもしれませんが。今この時にも、私たちの社会は多くの内的沈殿を抱えているはずですし、外的具象化として多くの物体や現象を送り出しているはずです。

「物体や現象の集まりが全体として表現している意味を捉える力」を駆使して、これらの物体や現象の集まりが表現している意味を掴みにいく努力が、西欧近代主義を超えたところに在るものを見えるようにしてくれるはずです。

この文明観と歴史観の要点をもう一度整理してみます。

- * 「環境からの働きかけの結果は無意識に沈殿する」、これが変化の源である。
- * 「無意識に沈殿しているものが具象化されて外部に現われる」、これが環境の変化となって文明の転換を促す。
- * 文明の歴史とは、「環境からの働きかけの結果の無意識への沈殿」と「無意識に沈殿しているものの外部への具象化」とが、時間の流れの中で相互作用を繰り返すことである。

3. 人類にとっての最高の善

自分のことを考える時、まず浮かび上がってくるのは、“人間としての存在”です。デカルトは人間としての存在を強く意識していました。そのことが、彼をして次のような言葉を言わしめています。

- ・実践的な哲学は、私たちを言えば自然の主人にして所有者たらしめることができる。
- ・実践的な哲学は、単に大地の実りと地上のあらゆる便宜を享受させる無数の技術を発明するために望ましいだけではなく、主として、健康を維持するためにも望ましい。
- ・健康はまぎれもなくこの世で最上の善であり、他のあらゆる善の基礎である。

彼が健康を最上の善としていることが、“人間としての存在”を彼が強く意識していることを示しています。17世紀の世界ではこれが最高の認識だったのでしょうか。何しろ、ダーウィンの「種の起源」が世に出たのはずっと後のことですし、後の世代の生存を脅かすような大きな問題などは全く見えていなかったのですから。

それから400年が過ぎた現代の世界で最高の善とされるのは“人類の持続的生存”です。そこには、地球上の他の生き物の生存も含まれており、“地球環境の維持”という言葉も使われます。西欧近代主義が推し進めてきた結果としての現状と、ダーウィンが道を開いた進化論とが、この世で最上の善についての認識内容に変化をもたらしたのです。

進化論はダーウィンの発表以降さらに発展を遂げており、現代の進化論を生み出すに至りました。このことに若干触れておきます。

ダーウィンの進化論の骨格を為しているのは、突然変異の発生、適者生存による自然淘汰です。強いものが生き残るのではなく、環境に適応したものが生き残るのです。生き物は常に突然変異を発生し、従来種と変異種とのうち、より環境に適応している方が繁殖を通して優勢になり、種として生き残っていくという訳です。

ところが、環境変化が激しく速い現代、ダーウィンの進化論がそのまま当てはまるとは言えないのです。最先端の進化論研究者である吉村仁教授は次のように語っています。

- ・ダーウィン流の適者生存は、環境変化による生存の危機が起きないとの前提で成り立つ。鳥類のある種は、産卵能力を下回る数しか卵を産まない。目一杯卵を産むと、余裕をなくして環境変化による生存の危機に遭遇した際に全滅しかねない。こうしたことが生きものの本能に刷り込まれていると考えられる。これが現実だ。

- ・生きものは危機と遭遇し、それを乗り越えることで進化してきた。人間社会も同じだ。環境変化による影響を受けにくくするため、私たちの祖先は集団生活を始め、都市を築き文明を育ててきた。即ち、協調が社会の基本にはある。

文明の初期段階では、生き延びるために皆が協調していた。しかし、生存が既定のものと思われるようになって、自分さえよければいいという自己利益の最大化に走りだした。このまま進めば、結果は滅亡だ。

現代の進化論では、環境変化を乗り越えるものが生存すると説きます。ある環境の下で繁栄し強大になるものは過剰適応の状態となり、環境変化に対応するための余裕を持てなくなっているというのです。

西欧近代主義が築き上げた現代社会を、現代の進化論の視点から見てみますと、人類にとっての最高の善の実現、即ち、人類がこれからも持続的に生存し続ける上で必要なことが鮮明な姿を見せてきます。

ブームを謳歌した人たちや企業が、社会環境の変化に遭遇して見る見るうちに凋落の一途をたどる例は少なくありません。一方、何百年と続く老舗が、利益の追求にのめり込むことなく、社会環境の変化への対応を積み重ねている例も多く見られます。

この違いは、環境への過剰適応と余裕の確保にあります。全ての資源を最大の利益が出ることに注ぎ込み、他のことに回すことをしなければ、環境が変化した時には注ぎ込んだ資源が機能なくなり、新しい環境に対応する余裕も無いという状態になります。老舗は長きにわたる経験から、そういうことをしないのです。

企業や事業者の例を見てきましたが、非営利団体、教育機関、自治体、国家、民族などにも当てはまることも容易に理解できます。

競争社会と呼ばれる現代社会は、生存が既定のものと思い込んでいる傾向が強く、自己利益最大化に走る人々が支配的だと言えます。ほとんどの企業がそういった方向を睨んで経営を行っていますし、受験競争や出世競争の背景にもそれがあります。

生活環境汚染や地球環境問題が多発し、民族紛争や宗教対立が激しくなっている今、そういった考え方や時代精神で進めば、人間が、そして人類が生き延びるための条件はさらに失われていくことが見えてきています。

自然界で長期にわたって生き延びてきた生物種は共生していたことが確認されています。

現代の進化論者が説くように、人間も協調と共生でこれまで生き延びてきました。ほんの数百年の間ですが、西欧近代主義がそれに背を向けてきたと言えます。

それが今少しずつですが変わりつつあることを感じます。いま人類には、自己利益最大化の精神を封印してその上位に、文明の初期段階と同じように協調と共生の精神を置くことが求められているのです。

人類が環境変化を乗り切って生存し続けるために必要なことは、環境への過剰適応の回避であり、環境変化に対応するための柔軟性と余裕を確保することであり、協調・共生の在り方を追求し実行することなのです。これらの実践こそが、人類の持続的生存、即ち人類にとっての最高の善を実現することにつながるのです。

この最高の善を追求し続ける過程で、価値観の変化の方向が鮮明になってくるはずですし、最高の善の実現のための具体的な手段や方法が浮かび上がってくるはずです。

このような状況の中で、

- ・われ交感す、という自己認識
- ・物体や現象の集まりが全体として表現している意味を捉える力
- ・環境の変化を基板に据えた適切な文明観と歴史観
- ・人類にとっての最高の善という価値観

といったものを機能させることを積み重ねていけば、西欧近代主義の向こうにあるものが見えてくるはずだと信じています。残念ながら、今のぼくには未だ見えていませんが。

西欧近代主義の向こうにあるものを見てみたいと思って、ぼくはこれを書き始めました。まずは原点に戻って、デカルトと付き合うことにしました。取り組みを始めた時には、ぼくはデカルトを批判する強い気持ちを持っていました。西欧近代主義の原点とも言えるデカルトの思想を批判することを通して、向こうにあるものが見えると考えたからです。

ところが想いとは裏腹に、ぼくはデカルトにのめり込むことになってしまいました。デカルトの思考や行動を知れば知るほどに、現代の西欧近代主義はデカルトの想いとは違う方向に進んできたのではないかと、という疑念が強くなっていきました。その結果として本書ができあがったのです。

執筆中に色々な想いが湧いてきましたが、骨となったのは次のようなことでした。

- ・デカルトの思想は後世の学者たちに誤解された。だから、現代文明の底流にある西欧近代主義はデカルトの思想が変質したものと言える。

- 本来の意味の西欧近代主義は否定されるべきものではないだろう。
- 西欧近代主義の原点であるデカルトの思想を補完する、後世の学者たちの思想も多く存在する。
- 西欧近代主義の向こうにあるものは、全く別の何かではない。それは西欧近代主義の中から生まれてくるだろう。文明の発展は別物に置き換えることでは起こらない。世界の歴史がそれを証明している。

ぼくの最終的な到達点は本章で伝えていることです。西欧近代主義の向こうにあるものはぼくには未だ見えていません。しかし、これを見えるようにすることはぼくだけの課題ではありません。多くの人たちにこの課題に取り組んでいただき、誰かがこれを達成してくれることを強く願っています。

(完)